

## トリサタパンデミック ― 少女秘封倶楽部 ―

私の通う京都大学は、はっきり言ってボロい。

創設何年だったかは思い出せないが、少なくとも三桁年はとうに超えていたはずだ。

今日も階段の手すりのペンキが剥がれかけているのを見かけたし、教室の椅子がキシキシ音を奏でるのも、放送用のスピーカーからゴボゴボと咳き込むような音が混ざり込むのも日常茶飯事だ。

せつかく高い学費を払っているのに（と言っても国立だし、払っているのは親だが）、私たちの学習環境は一向に改善される様子がなかった。

比較的新しい新校舎ですらそんな有様なので、少し離れたところにある旧校舎はもっと悲惨だった。

もっとも旧校舎で講義が行われたことはなく、私も入学したての頃に学内見学のオリエンテーションで一度見て回っただけだったが。

さて、なぜ先ほどから私が過去形で話しているかと言うと、実はこの度、大規模な修繕工事が行われることが決定したのだ。実に喜ばしいことである。

それを知ったのは数日ほど前。その日は比較的暖かく、私は蓮子と掲示板前で待ち合わせをしていた。

「遅い。五分の遅刻よ」

私は腕時計を返し、若干の怒気を込めて言い放った。

「正確には四分と五六秒ね。今、午後五時五分ちようどになったわ」

蓮子は空を見上げながらそう答えた。星がそろそろ見え始めようとしていた。

「反省する気ゼロでしょ」

「いやーメンゴメンゴ。ゼミが長引いちゃって。そんなことよりメリーの方からお誘いが来るなんてね」

ニヤニヤといつもの猫のような笑みを浮かべて蓮子は言う。

「どういう風の吹きまわしかしら？」

確かに、これまでの活動は、もっぱら蓮子が仕入れてきたおかしな場所を巡っては、その度に不思議な体験をしてきた。おおよそ世間一般の女子大生像とはかけ離れた体験だ。

まあ、それが私たちにらしいと言ってしまうえばそれまでかもしれない。秘封倶楽部でしか味わえないことも少なくない。ひとえに活動のおかげと言わざるを得ないのもまた事実だ。

「そんな風に言うのならやっぱりやめようかしら」

つーんと素っ気ない態度を取ってみると、蓮子は「冗談よ」とはにかんで見せた。

「私はねメリー」

それから心底嬉しそうにこう言い放った。

「今日という日をどんなに待っていたことかしら」

「どんなに——って、え？」

思わずしゃっくりしそうな声になって蓮子を見つめる。

「だって嬉しいじゃない。初めてメリーの方からお誘いがあったんだもの。実を言うと心配してたんだから。このままメリーがオカルトに興味を持たないまま、時間だけが過ぎて行ってしまうんじゃないかって」

「まったく大げさねえ……」

蓮子は興奮を隠す素振りすら見せず、目を輝かせて私の手を握りしめる。その様子はまるで、新しい玩具に心躍らせている子供のそれだ。

もっともどうしてこう、この相棒は人が聞いたら赤面するようなことを平気で口に出るのだろうか。

ひとまず場所を図書室の談話室に移す。夕方のこの時間ということもあって、私たちの他に利用者はいない。噂話をするにはもってこいのロケーションだ。

「それで？ メリーののっておきって？」

ポンと手のひらを顔の下で合わせた後、眩しいくらいの眼差しで覗き込むように顔を寄せてくる。この時間ということもあって、より一層眩しさを感じる。

「えっと、自分でハードル上げておいてなんだけど、ちよつとした噂話があつてね」

一先ず予防線を張りつつ、キラキラ蓮子を遠ざける。そして昼間クラスで耳にした話の内容を思い起こしながら言葉に紡いでいった――

「柳池の幽霊!？」

私とそのキーワードを出したところで、蓮子が素っ頓狂な声を上げた。驚き半分、もう半分は「待ってました」と言わんばかりのそんな声だ。

「……うん。確かにそう言ってたのよ。同じ学科の子が話していたから間違いはないと思う」

それはちやうど講義終わりの教室でのこと。

いつも後ろの方に座っていることもあって、教室での私の視野は比較的広い。ざわつく教室内で、偶然同じ学科の子たちの話し声が聞こえたのだ。

「その子が言うにはね、柳池で女の人の幽霊が出たのを見た人がいるって……」  
話を耳にした時、真っ先に私の頭に横井也有よこい やゆうの『鶉衣うすぢころも』が思い浮かんだ。

『幽霊の正体見たり枯れ尾花』

もつともあれはススキが幽霊に見えたという俳句だが、古来より幽霊の出る場所とくれば枝垂れ柳が次いで出るくらいには有名な組み合わせだ。

「ちなみにだけど、枝垂れ柳は黄泉の国と繋がっているとされてるらしいわ。天から降ってきた霊が枝垂れを伝って地面の下にある黄泉の国へ行くための道というわけね」

「流石メリーはこの手の話題になると強いわね。その割にホラーが苦手っていう茶目っ気具合がまた何とも言えないわ」

「一言余計よ」

私が言うと、蓮子は軽くため息を付いた。

「んでも、とっておきと言う割には曖昧な部分が多いわね。その子の作り話という線は？」  
その時の様子を思い出しながら、私はゆっくりと首を振る。

「それはないと思う。そんな冗談を言うような子じゃないもの。それに……」

「それに？」

いつの間にか蓮子はテーブルの上で手を組み、こちらの目をジッと捕らえるように話を聞いていた。

まるで尋問か取り調べでも受けているような構図の中、私は次なる証言を突きつける。

「その一回限りじゃないのよ。さっきの掲示板前でも同じ話をしてる人を見かけたわ」  
教室から出た後、私は次の講義の休講情報を確認しようと、教務部前をうろついていた。

「結構な人混みだったから誰が話していたかまでは分からないけど、こんな短期間に二度も『柳池の女幽霊』が噂されていたのよ。これってすごい怪しいでしょ？」

私の話の間、蓮子は眉を寄せては唸ったような声を上げたり、時より首をかしげながら聞いていた。流石の蓮子でもいきなりこんな話をされたら困惑するだろう。

「って、いくらなんでも信じられないよね。今時幽霊話なんて——」  
言いかけたその時だった。

「あのゴメン。そもそもなんだけどさ。柳池って何？もしかしてこの大学内の場所のこと言ってる？」

「えっ!? そこのな!!」

思わず今度はこつちが素っ頓狂な声を上げてしまった。真剣に話を聞いていたかと思えば、悩んでいたのがそこかと思うと、一気に肩の力が抜けてしまう。

「知らないの？一年も通ってて？うちの大学じゃ割とメジャーな場所じゃない？」

京大の枝垂れ柳といえど大学のシンボルともいえる木で、大学紹介パンフレットやホームページなど至る所にモチーフとなったシンボルマークが採用されている。同じ京大生なら知っておいてほしい場所である。

「確かに今は殆ど使われていない旧校舎側だし、全員が全員知っているわけでもないんでしょうけど……でも情報通の蓮子なら絶対知ってると思っただのに」

そこまで説明したところで、蓮子の指がパチンと乾いた音を立てた。

「ああ！ 柳池って丸池のことね？」

「……丸池？」

今度は私が頭にハテナを浮かべる番だ。

「そ。メリーが言ってるのはさ、旧校舎に行く途中の庭にある大きな池のことでしょ？ あれ、こつちだ理系と丸池って呼んでいるのよ。上から見た形が丸いから丸池。ね、合理的でしょ？」

言われてみれば確かに池は周囲をぐるりときれいな円形に形取られている。

「学部によって呼び方が違ってはいるなんて知らなかったわ」

「正式な名前は決まってなさそうね。大学史か何かを調べてみれば由来くらい分かりそうだけ」

そう言って蓮子は書架の方に顎をしゃくった。……お行儀が悪い。

「そこまで調べるつもりもないけど——」

私自身、こんな幽霊話を真正面から信じられるほどお人好しではない……つもりだ。かといってただでさえ苦手なホラー話が、自分の通う大学内で噂されているのを無視できるほど神経太くもない。

「——決まりね」

「え？」

蓮子の声にふと顔を上げる。その猫のような瞳が笑顔と共にきゅっと細くなった。「要するに気になるんでしよう？ なら調べてみようよ」

思いがけない提案に私は目をしばたかせて「いいの？」なんて聞き返していた。

「でも本当にただの噂話だったら……」

「それならそれでいいじゃない。ほら暗くなる前に行こう？ あ、でもそれじゃ幽霊見れないか」

と、そんな調子である。

「よしそうと決まれば早速調査開始ね」

さっそうと蓮子が立ち上がる。迷いなんて感じさせない何処までも真っ直ぐで素直な姿勢。

そんな蓮子を見てみると、もうちょっぴりだけ学生生活の比重をサークルに傾けてみるのも、やぶさかではないなんて思えてしまうから本当にズルい。

なんだかくすぐったい気分の私は、小さなため息で誤魔化してみせた。